（二） 敦煌の俗講儀式

講経文の役割を考えるにあたって、まずまず、俗講儀式について整理しておく必要がある。

唐代講経儀式の発展の過程を知るために、西暦八八七年より十年にわたる留貞生活を記した慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』は、重要かつ非常に貴重な資料である。特に、巻二『赤山院講経儀式』等を土台とした講経文の再現が、重要な資料として、国内外の研究者に興味をもって読まれているはずである。と考えるのが筆者の立場である。

一、俗講儀式における講経文とその上演について

講経文は俗講儀式の中心であり、講師は講経文を唱経し、聴衆はこの講経文の音読に従う。講経文の内容は、仏教の教義や経典を唱経し、聴衆に教化を図るものである。

（1） 読経

読経は、講師が読経文を読み上げることで、聴衆に教化を図ることである。読経文は、仏教の教義や経典を唱経し、聴衆に教化を図るもので、法師が講師に役立つものである。

（2） 唱経

唱経は、講師が唱経文を唱経し、聴衆に教化を図ることで、聴衆はこの唱経文の音読に従う。唱経文の内容は、仏教の教義や経典を唱経し、聴衆に教化を図るもので、法師が講師に役立つものである。
（二）現代講経文の再構成

次に、現代の講経文作品を真似て発案して全體の傾向と特徴を整理し、講経文の上演に関する一考察

これらがみな同列に挙げる作品であるのをいま一度確認した。

（四）教導文の校正

おいて講経文と仮題されている作品のうち、講経文部分を五〇句以上残す二十一種の特徴は、次表に挙げることで

| 三十三 | 三十二 | 三十一 | 三十 | 二十九 | 二十八 | 二十七 | 二十六 | 二十五 | 二十四 | 二十三 | 二十二 | 二十一 | 二十 | 十九 | 十八 | 十七 | 十六 | 十五 | 十四 | 十三 | 十二 | 十一 | 十 | 九 | 八 | 七 | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |
|--------|--------|--------|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 三十二 | 三十一 | 三十 | 二十九 | 二十八 | 二十七 | 二十六 | 二十五 | 二十四 | 二十三 | 二十二 | 二十一 | 二十 | 十九 | 十八 | 十七 | 十六 | 十五 | 十四 | 十三 | 十二 | 十一 | 十 | 九 | 八 | 七 | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 |

（五）生産 quiere...
後述する四別の四作品を除くと、例講儀式の『説経本文』で演じられたと考えられる一般的な講経文にはほぼ類似性が認められ、以下の特徴が見出されることで、

（1）四作品の講経文部分は、全句数が三百句前後であることが多く、

（2）各句文による解説・語文による歌詠の一サイクルを段と呼ぶとするが、

（3）五言句と七言句の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（4）『説経本文』は四箇所の一部を除いた四箇所の全句を講経文として用いることが多く、

（5）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（6）『説経本文』は各講経文の一つを言葉の重要なものを呼ぶことによって、

（7）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（8）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（9）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（10）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（11）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（12）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（13）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（14）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（15）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（16）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（17）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（18）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（19）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（20）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（21）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（22）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（23）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（24）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（25）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（26）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（27）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（28）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（29）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（30）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（31）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（32）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（33）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（34）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（35）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（36）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（37）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（38）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（39）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（40）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（41）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五

（42）講経文の合計数のうち、近縁詩の平仄則を講経文の詠文の音節を合わせると、五
講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察

講経文の上場に関する考察
二三八

（二）二三八

《佛誦父母恩重經講經文》

その分析

以上の通り、講経文は俗講儀式に組み込まれ、正午前から刻にかけての数時間にわたって演じられていた。その際、都講によって経文を唱え、それを通じて講師は聴衆の心を導き、信仰を深め、教化の目的を達成しました。
これらの音符コードは、時代における唱経の発展を反映している。

王氏の提唱する唱経（呪詛音楽）とは、西域由来の合奏音楽であるから、具体的な楽器名は述べない。同文が固定した律調を用いた調律であるとも述べている。このように、王氏の提唱する唱経（呪詛音楽）は、西域由来の合奏音楽にあたる。したがって、同文が提唱する唱経（呪詛音楽）は、西域由来の合奏音楽にあたることになる。
「唱将來」句は、尾末の句の第２字が必ず「將」、そのうえ平声字になる slogan のために、全句平声となっている。それ以外の平声で、二・四の仄声が二・四の仄声を唱じる「唱将來」句の平声配置が極めて似ている。この特徴は、「雙唱高第」等の例外を除き、ほぼ全ての講文文に共通している。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、

句の多くが通通するのものである。

一方、仄声門は二・四のように構成されているのだろうか。こちらも、
十月懐其親

十月懐其親

十月懐其親
鰤

鰤は、鰤属の魚で、肉厚で味がよいとも言われています。鰤は主に太平洋西部に分布し、特に日本や中国近海で豊富に産出されます。鰤の成長は比較的速く、一般に3年で成熟します。鰤は主に深海や大漁場で獲れることが多く、特に夏期には好漁期となります。鰤は肉厚で味がよいことから、焼魚や煮魚、寿司などを通じて幅広く楽しむことができます。
胡楽 - 高麗楽等が奉納され、様々な舞が催されたという記録が存在する。各国の音楽が演奏される楽舞は、唐初に隆盛を誇った宮廷の儀礼の音楽であった。

胡楽の伝説は、『高麗史』に記載されている。胡楽は、東大寺で開催され、皇帝や皇族が参加する重要な儀式で、楽器はさまざまなものがあり、楽曲は数多く存在した。

大佛供養会は、唐初の儀礼の音楽である。六月の万花会、千花会および解封会、十二月十四夜の万燈会等に楽人を務め、奉納されたものである。楽部は、唐の音楽と高麗の音楽が混ざり合ったもので、東大寺の開眼供養会等で演奏された。

さらに、後には、胡楽は日本国内でも流行し、平安時代には「胡楽部」が設置され、胡楽は日本音楽の源流とも言える。

また、胡楽の伝承は、日本全国に広がり、現在でも各地で伝統的な胡楽が演奏されている。

経典・梵音とは対照的に、胡楽の伝統は、北朝初期に成立し、『高麗史』に記載されている。胡楽の伝承は、後漢に伝来したと考えられているが、日本国内での伝承は、後漢の時代に始まったと考えられている。

胡楽の伝承は、その後も、日本国内での伝承は、後漢の時代に始まったと考えられている。
こうした宗教の心は、譲渡と混同される梵統は論外として、伝来当初のものではない。隋唐時代にはすでに中国各地の民謡などを取り入れて、『清高論』における梵音を形成し、後世に伝わる宗教の心は、これに影響を受けて形成されたものである。

これにより、講談文の上流は、伝来当初の梵音を導入し、道調を用い、『清高論』に影響を受けて形成されたものである。
四　おわりに

講文が制作・上演される晚唐五代時代には、様々な佛教儀式で演奏される楽曲が用いられていた。それらはさまざまな名前をつけて呼ばれていたもので、単独では不完全で、相互に関連していると考えられる。講文の経文に基づいて、この時期の楽曲の一部を再現しようと考えた。なお、この研究は一部、講文の解釈を伴うものである。